opusdei.org

「聖霊を悲しませて はいけません」なま ぬるさ(1)

なまぬるさは心の病です。それによって、霊魂は神との関われらればりし、つにはりにうんざりとはといいの場所にあるのだ」と思うにます(シリーズ・戦しさ、使命 [4])。

2025/02/08

ホレブ山の柴の間に燃えあがる大きな炎の中で主の御使いがモーセに現

れます。これは聖書に記されている 最も初期の、そして最も有名な神の 顕現の一つです。「彼が見ると、見 よ、柴は火に燃えているのに、柴は 燃え尽きない。 モーセは言った。

よ、柴は火に燃えているのに、柴は 燃え尽きない。モーセは言った。 『道をそれて、この不思議な光景を 見届けよう。どうしてあの柴は燃え 尽きないのだろう』」(出エジプト 3・2-3)。神は愛です。その愛の炎 は常に新しく、時とともにただ煙を 残して消え去るようなものではあり ません。その愛は永遠に燃え続け、 もし私たちが望むならば、私たちを 包み込み、温もりと光をもたらしま す。それゆえ、神はモーセに言いま す。「わたしはある。わたしはある という者だ」(出エジプト3・14)。 神は愛です。その愛は忠実であり、 永遠に生き続けます。そして、神は 自身の似姿として私たちを創造し (創世記1・27参照)、そのような愛

(創世記1・27参照)、そのような変へと私たちを定めました。ですから 私たちの心はそれ以下のものでは満

足しません。私たちの愛もまた、燃

えあがり、常に新しく、時とともに さらに成長していく以外ないので す。

ある人が、昔何年も住んでいた家を 訪れます。そこはかつて、家族とと もに暮らし、愛に溢れ、笑い声が響 く場所でした。しかし、今その家は 空っぽで、見捨てられ、廃墟となっ ています。その光景を目にしたその 人は、あの頃の幸せだった日々を思 い出し、胸を締めつけるような郷愁 に襲われます。このイメージは、私 たちの愛が冷め、消えてしまったと きに似ています。かつて温もりに満 ち、永遠の喜びを約束していた愛 ――すべてだったはずの愛が、今は 燃えかすのようになっています。な んと悲しいことでしょう!これがな まぬるさの正体です。もともとは美 しく、心を喜びで満たしていた愛 が、少しずつ消耗し、ついにはほと んど消えかかってしまっています。

それは時の流れに耐えきれなかった 愛の姿です。

ゆっくりと死んでいく

冷めるということは、かつては燃え ていたということです。それゆえな まぬるさは、まだ愛を捧げたばかり の人にとっての危険ではありませ ん。彼らの愛はまだあまりにも無邪 気で初々しいものだからです。しか し、すでに長く灯され続けてきた愛 にとっては、これは非常に現実的な 危険です。それは突然の死ではな く、ほとんど気が付かないうちに ゆっくりと進行する病のようなもの ――まるで、登山家が「白い死」と 呼ぶ凍死のようです。極寒と疲労が 混ざり合い、体の反応が次第に鈍く なり、最終的には甘美だが致命的な 眠りに落ちてしまうのです。

なまぬるさについての考察は、教会の歴史の初期から存在していました。3世紀から4世紀にかけて、オリ

ゲネスやエヴァグリオス・ポンティコスは、「アケディア」について語っています。それは、霊魂が倦怠に陥った状態のことで、人生のく朝〉には現れません。むしろ、太陽がすでに天高く昇った時間帯、つまり人生の中盤にやって来るのです。そのため、彼らは詩編91にちなんでこれを「真昼の悪魔」団と呼びました。

アケディアは、怠慢や無関心を意味します。後の神学者たちはこれを「テピディタス(なまぬるさ)、本のはいるようにな現象を指してがは同じ霊的な現象を指してでない。それは「放棄と怠惰により、不注意は耐多とができない」「別からです。をない」「別からです。なばなり、はありません。

福者アルバロは、なまぬるさがどの ように進行するのか、その恐ろしさ を示してくれます。「善に対して目 は閉ざされ、自己満足に強く目が行 くようになる。なまぬるい意志は、 魂の中に自己中心と傲慢の腐った沈 殿物を積み重ね、それが蓄積するに つれ、あらゆる立ち振る舞いに肉欲 的な雰囲気が生じ、それが進行して いく。この悪を断ち切らなければ、 なまぬるさの沈殿物に染められた最 もみじめな欲望は日ごとに強さを増 していき、存在感を示す。そして、 埋め合わせを求める気持ち、ほんの わずかな要求や犠牲に対する苛立 ち、些細なことでの不満、むなしい 会話や自己中心的な話題、そのよう なものが生じます。 (…) そして、 犠牲や節制が欠けるようになり、諸 感覚が目覚め、強烈な誘惑に襲わ れ、愛が冷め、確信をもって神につ いて語る使徒的情熱が失われてい < | TATO

これがなまぬるさのたどる道筋で す。少しずつ、すべてを曇らせる悲 しみが魂の中に入り込んでいきま す。以前は心を満たしていたこと が、もはや何の感動も与えなくな り、次第に世俗的な考え方をするよ うになってしまいます。なまぬるさ は魂の感覚を歪め、心は神との関わ りにうんざりします。そして、つい には「私の本当の人生はどこか別の 場所にあるのだしと思うにまで至り ます。聖アウグスティヌスは、自ら の経験に基づいて、こう書いていま す。「健康な舌にとって美味なるパ ンでさえも、病んだ舌にとっては拷 問であり、澄んだ目を魅了する光 も、病んだ目には嫌悪すべきもので ある 1 1510

なぜこのような状態に陥ってしまったのでしょうか?生き生きとした愛がこのように冷めてしまうことなどあり得るのでしょうか?その根っこには、おそらく人生への幻滅があり

ます。たとえば失望や困難によっ て、かつての純粋さや熱意を失って しまうのです。その変化は、ほとん ど気が付かないうちに生じるかもし れません。しかしそれは魂にしみ込 んでいきます。その人は、神のため の時間を削り始めます。なぜなら、 「生活プラン」(霊的生活を養うた めに一日の予定の中に組み込む信心 業)は、単なる義務の積み重ねのよ うに感じられるからです。そして使 徒職の使命に対する夢を失い、その ための努力をやめます。それは、周 囲の雰囲気から生じる困難や、実り を目にしないことによる落胆のせい かもしれません。「わたしたちは 皆、実体験によって知っています。 時に、仕事は期待どおりの満足を与 えてはくれず、収穫は乏しく変化は 遅々としていて、うんざりしてしま いそうになることを。しかし、疲れ のためにしばしの間手を止めること と、慢性的な不満や魂が渇き切って しまうほどの怠惰(アケディア)に

支配されて、決定的に手を止めるこ ととは異なります」「ほ」。この種の不 満は心を徐々に冷やしていきます。 それは「自己の行動を日々振り返る ことの放棄、その振り返りに対する 無気力と気怠さによって起こりま す。今日、これを省略し、明日はあ れを軽視する。理由もなく小さな犠 **牪を省き、ちょっとした不誠実を許** し……そのようにして神を悲しませ ることに慣れていきます。それらを 糾明によって戦いのテーマにするこ とをやめてしまうのです。こうし て、なまぬるさへと至る道を歩み始 めるのです。忘れてはなりません。 おろそかな糾明の隙間から冷たさが 入り込み、それが最終的に魂を凍ら せてしまうのですしてい

神は私たちの心の扉を叩いている

ヨハネの黙示録にある、なまぬるさ についての厳しい言葉は有名です。 「わたしはあなたの行いを知ってい

る。あなたは、冷たくもなく熱くも ない。むしろ、冷たいか熱いか、ど ちらかであってほしい。 熱くも冷た くもなく、なまぬるいので、わたし はあなたを口から吐き出そうとして いる」(黙示録3・15-16)。しかし この後に続く言葉は、あまり知られ ていないかもしれません。それは神 がこれほど厳しい言葉を用いて何を 伝えたいのかを理解する手助けとな ります。「あなたは、『わたしは金 持ちだ。満ち足りている。何一つ必 要な物はない』と言っているが、自 分が惨めな者、哀れな者、貧しい 者、目の見えない者、裸の者である ことが分かっていない| (3・17)。 このなまぬるい者への非難のように 思える言葉の奥に神の心が垣間見え ます。主は強い口調で語りかけるこ とによって、その人に自身の状態を 理解させようとします。彼の状態は 福音書のたとえ話に登場するあの男 に似ています。彼は豊作の後に自分 自身にこう言いました。「さあ、こ

れから先何年も生きて行くだけの蓄 えができたぞ。ひと休みして、食べ たり飲んだりして楽しめ」(ルカ 12·19)。彼の誤りは、神の前に豊 かになろうとせずに、自分のために 富を積んだことにありました(12· 21参照)。彼は自分自身にばかり目 が行って、その結果、破滅へと向 かっていることに気が付かなかった のです。

鍛えたりする。だから、熱心に努め よ。悔い改めよ。 見よ、わたしは戸 口に立って、たたいている。だれか わたしの声を聞いて戸を開ける者が あれば、わたしは中に入ってその者 と共に食事をし、彼もまた、わたし と共に食事をするであろう」(黙示 録 3・18-20)。主は私たちをその惨 めな状態から引っ張り出したいと望 んでいます。神は私たちの魂の扉を 叩いています。あの頃のように、私 たちと親しく交わりたいからで す。……しかし、それには私たちの 協力が必要です。あらためて、愛を 燃え上らせるための手段を講じるこ とが。

[1] E. Boland, «Tiédeur», Dictionnaire de Spiritualité, vol. 15, c. 918参照。

- [2] フェルナンド・オカリス『福音の光のもとに』(F. Ocáriz, A la luz del evangelio, Studium, Madrid, 2020)。
- [3] 聖アウグスティヌス、詩編注解 (San Agustín, Enarrationes in Psalmos 31, 5.)。
- [4] 福者アルバロ、司牧書簡、1980年1月9日、31番(Beato Álvaro, Carta pastoral, 9-I-1980, n. 31 [Cartas de Familia II, n. 275; AGP, biblioteca, P17])。
- [5] 聖アウグスティヌス『告白』(San Agustín, Confesiones 7, 16.22)。
- [6] フランシスコ『福音の喜び』277 番。
- [7] 福者アルバロ、司牧書簡、1976 年12月8日、8番(Beato Álvaro, Carta pastoral, 8-XII-1976, n. 8

[Cartas de Familia II, n. 116; AGP, biblioteca, P17]) 。

José Brage

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/combat-closeness-mission4-1/(2025/12/19)